

グローバルゼーション, 文化の政治, アイデンティティの政治

澤田 眞治

岐阜大学

広島大学平和科学研究センター客員研究員

Globalization, Cultural Politics and Identity Politics

Shinji SAWADA

Gifu University

Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

This article is an attempt to examine several theoretical frameworks on cultural globalization in connection with trans-national relations. The term of Globalization has become a key-word to describe the post-cold war and the post-hegemonic world, especially as regards the economic sphere of international relations. In comparison with the economic one, the cultural aspect of global process, for instance global homogenization, has hardly been analysed theoretically. In recent years, however, with the rapid increase of interests in causation and consequences of globalization innumerable works on the 'global' are offered in various realms of social sciences. Thus this article considers political implications of cultural globalization and deals with a few of issues concerning with it as follows. First, cultural phenomena such as trans-culturation, acculturation, hybridization and so on, brought about by the global proc-

ess, are examined in the context of world-system critics. Second, it is clarified that cultural globalization is closely related to the process of formation of collective social identities of diverse groups in the marginal, which must be understood with regard to its political significance. Third, it is pointed out that globalization does not erase difference and power from political life, but brings about new possibilities for cultural/identity politics to enlarge the horizon of political thinking and action.

I はじめに

冷戦の終焉によって国際政治からイデオロギーや軍事力による明確な対立軸が消滅して久しい。1990年代初頭の論壇を賑わせたF・フクヤマ (Francis Fukuyama) が「歴史の終焉」において描いた同質化された世界は自由民主主義の地球的規模での勝利を宣言したものであったが、それは地球上にいかなる対立ももはや存在しないと断言するに等しいものであった。つまり、実際に対立が存在するか否かには関係なく、冷戦後の世界にはイデオロギー的な対立など全く存在しないと(特に先進国の国民に対して)信じ込ませることを企図したものであったと見なすこともできる。交渉を通じた平和的な手段であれ、武力を用いた軍事的な手段であれ、国際「政治」の根幹に関わる問題が国家を含む当事者集団のあいだの利害の調整と究極的には統合の実現にあるとすれば、フクヤマが描いた世界にはいかなる対立ももはや生じる余地すら残されていない、ある意味では政治の消失した世界であった。ポスト冷戦世界を、先進国はもちろん発展途上国においても積極的に導入される新自由主義的な経済政策と国境を越えて勃興する地域経済圏にみられる経済的なグローバル化ばかりに力点を置いて捉えようとする見解は、フクヤマほどには露骨ではないにせよ、暗黙のうちに、世界には一つの方向性以外には発展の道筋など他に存在しないという点を了承しており、あらゆる問題を制度的な民主主義の不在に帰して、構造的な要因を隠蔽する傾向にある¹⁾。

グローバル化の行方についてフクヤマにみられる見解は「新世界秩序」が構想された冷戦の終焉後の楽観的な雰囲気の中で提示されたが、長続きするものではなかった。むしろ、市場経済への転換に伴う混乱に見舞われた旧共産圏諸国や超大国からの援助の削減に直面したサハラ以南のアフリカ諸国において地域紛争が頻発するなかで²⁾、また冷戦時代に結ばれた軍事的な同盟関係の冷戦後の役割が不明瞭になるなかで、冷戦後の世界についての明確な対立軸と新たな見取り図が必要とされたのであった。S・P・ハンティントン (Samuel P. Huntington) の「文明の衝突」についての議論が注目された理由をこの文脈に求めることができる。日本を単一の固有の文明圏として捉え、イスラム諸国をテロリズムのイメージに結び付けて和解できない相手とみなし、さらに天安門事件の影響から民主主義や人権と

いった価値観について共存できない相手として中国さえも潜在的に敵視するような文明間の闘争を予測する議論には妥当性どころか、むしろエスノセントリズム（自民族中心主義）すら感じる向きもあろう³⁾。もちろん、湾岸戦争がこのような知的退行を加速したことは疑いない。1986年のトリポリ空爆の後に国際社会においてその影が薄くなったリビアのカダフィ大佐の後継者であるかのように、90年代にはイラクのフセイン大統領がイスラム圏の侵略的な独裁者としてグローバル・メディアのなかでいくぶん戯画化されているが、80年代を通じてのイラン・イラク戦争に続く90年のクウェート侵攻は、皮肉にも、このようなイスラム〈異質=脅威〉論を正当化するのに貢献したのであった。

さて、ハンティントンの議論において「文明」は（多くの場合には経済協力の進む地域と重なる）地理的に近接した複数の国々を結び付ける「同質的」な要素として描かれている。だが、A・アパドゥライ（Arjun Appadurai）やU・ハンネルズ（Ulf Hannerz）が述べるように、文化的な差異がますます顕著になっているのは、一国の社会の「内部」においてであって、複数の国々の社会の「あいだ」ではない⁴⁾。だからといって、国内における文化的な差異の存在が共生を不可能にして、民族紛争にみられるような社会的な分裂と対立をもたらすわけではない。一つの国の内部において複数の民族が存在することが必然的に紛争をもたらすという考え方は、一つの地球上に複数の文明が存在することが必然的に衝突をもたらすというハンティントンの見解とともに、「新世界無秩序（New World Disorder）」のディスコースを編成しているのである。また、これらの議論は並行的な関係にあり、異質性を対立と紛争に、同質性を安定と平和のイメージに、それぞれ結び付けがちであることから、あまりにも短絡的な結論を導く傾向にある⁵⁾。

しかしながら、議論の内容は別にしても、このような議論が流布した事実から学ぶべき点も多くあろう。なぜなら、冷戦後の世界において文化をめぐる国際関係、あるいは文化政治と世界政治の問題について検討することの重要性を指摘することができるからである。なかでも平和研究に携わる研究者にとっては、核軍縮の実現だけを望む時代は既に終わっており、むしろ地域紛争などの問題を考えるうえで、紛争防止のためにはこれまで重視してきた軍事・政治・経済といった分野のみならず、共生の条件としての文化やアイデンティティなどの問題について取り組む必要

がろう⁶⁾。「文化越境 (transculturation)」や「文化変容 (acculturation)」をめぐるのは、かつて、南北問題の文脈において「文化帝国主義 (cultural imperialism)」の問題が検討されたことがあった。だが、日本を含めた列強諸国による帝国主義が全盛の時代はさておき⁷⁾、これらの議論は独立後の発展途上国のそれぞれに「国民文化 (national culture)」の必要性や存在を前提としており、また第三世界を新植民地主義のなかに繋ぎ留める手段として先進国の文化が議論されたために、第三世界のナショナリズムが高まった時代において文化をめぐる従属理論を構築する試みに過ぎなかったと考えることができる。経済的な従属理論が第三世界を先進国に対して全く無力で受動的なものとして描いていたように、文化帝国主義の議論も南の世界の発展途上国からのイニシアティブをあまり考慮しないものであった⁸⁾。

だからといって、国家間の関係性と軍事力に力点を置いた旧来からの国際関係論の分野においては、文化やアイデンティティについての視点は、皆無であったとは言えないまでも、極めて限定的であり、周縁的にしか扱われてこなかった。また、これらが論じられる場合も、国際政治学に一般的であった国家中心主義への対抗的な視座として議論されがちであった⁹⁾。また、この点については社会学の理論的な視座についても該当する。例えば、R・ロバートソン (Roland Robertson) は、後述するように、旧来からの社会学の学術的なパラダイムが一国規模の「国民社会 (national society)」に専ら依拠して考えられてきた点を指摘する。近年、国際移民の増加や起源の地から遠く離れて存在する文化の存在にみられるように、文化はますます「脱領域化 (deterritorialization)」の傾向にあるが、このような人と文化の「ディアスポラ (離散: diaspora)」が進行する状況においては旧来からの一国的な視座に依拠した理論的なパラダイムではもはや対応できないものとなりつつある。

この新しい状況を把握するために、アパドゥライは旧来からの社会理論の限界を指摘して、現代のグローバルな相互作用がもたらす問題を考えるうえで、グローバルな文化の流れ (flow) を理解する必要がある、その基本的な枠組みとして以下に示す文化の流れについての5つの次元を提示する。それらは、〈i〉エスノスケープ (ethnoscapes: 旅行者・移民・難民・亡命者・外国人労働者などのヒトの移

動)、〈ii〉テクノスケープ (technoscapes : 多国籍企業や民族資本, また国家機関による技術移転や機械やプラントの流れ)、〈iii〉ファイナンススケープ (finanscapes : 為替市場や証券取引における急速な資金の流れ)、〈iv〉メディアスケープ (mediascapes : 新聞・雑誌・テレビ・映画などによって産出され、配分される情報の流れ)、〈v〉イデオスケープ (ideoscapes : 自由や福祉, また権利をめぐる国家とそれに対抗する運動に関連するイデオロギーの流れ) であり、それらのあいだの断裂を明らかにすることで文化的な同質化と異質化のあいだの緊張を捉えようと試みている¹⁰⁾。

さて、興味深い点として、これまで世界システムに関する議論を展開してきた I・ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) が、後述するように、文化に関連する議論を近年発表していることである。社会科学において国民国家を単位とする比較の視座の有効性を常に否定して、世界を単一のシステムとして捉えようとする彼の試みに対する批判は少なくはない。ウォーラーステインの世界システム論に対して当初、寄せられた批判の多くは世界市場を過度に強調している点を指摘した、その経済主義 (economism) 的なアプローチについてのものであった。だが、以下に論じるように、1980年代後半から世界システムに関する概念的な次元が批判されるようになった。しかし、経済のグローバリゼーションがもたらす文化のグローバリゼーション、あるいはグローバル・カルチャー (global culture) の特質とその社会的・文化的な影響、さらにはその政治的な影響について検討を試みる場合には、このような包括的なパースペクティブからはこれまで見逃されがちであった多数の論点が提示されることも期待できる。

したがって、本稿では、グローバリゼーションのプロセスとそれが及ぼす影響について考察するための準備作業として、まず世界システムにおける文化の問題とその批判について取り上げ、次に言わば「文化をめぐる南北問題」における南の世界の状況を考えるうえで文化帝国主義に代替することが可能な視座について検討する。そして、グローバリゼーションがもたらす文化越境／変容、文化の政治あるいはアイデンティティの政治の連関について予備的な考察を加えることにしたい。

II 世界システムにおける文化の位置^{ポジション}

ポスト冷戦とポスト覇権の世界においてグローバリゼーションがもたらす文化的同質化の問題を考えるにあたって、ウォーラステインによる「世界文化 (world culture)」の存在可能性についての議論は一つの手掛かりとなろう。世界システム論についてはここで紙幅を割いて詳述することは控えるが、ウォーラステインにとって唯一の社会システムは世界システムであり、それは単一の分業と多数の文化システムから成る一つの単位であるが、共通の政治システムの有無によって論理的には二種類のもので定義される。つまり、共通の政治システムを有するものが「世界帝国 (world empire)」であり、無いものが「世界経済 (world economy)」である¹¹⁾。さて、ウォーラステインは基本的には世界文化という概念に懐疑的な見解を採るものの、その存在の可能性について以下の点を指摘する。つまり、独自の国境と伝統を有する国民国家の創設が普遍的な現象となってきたのと並行して、人権問題に代表されるような一つの世界的な意識へ向かって進んできたことである。言い換えれば、一方では個別なものとしてネイションが、他方では普遍的なものとして人間性といったものが、それぞれ歴史的に創出されたのであった。そして、これらの国民国家ですら、時間の経過に伴って、立法や行政などの政治制度から建築物や美術といった芸術の形式にいたるまで似通ったものとなっているのである。さらにナショナリズムが高揚すればするほど、逆説的にナショナリズムの表現形態について画一性が認められる傾向がある。これらの原因の一つとして交通やコミュニケーションの手段の発展によって文化の伝播が促されてきた点が指摘される。だが、それではこのような文化的なクローン化が進展する状況の下では、一体何が独自の文化的な差異や排除を求めさせる圧力となるのであろうか¹²⁾。

ウォーラステインは文化を総体よりも小さな部分における一連の価値観や慣習として定義したうえで、文化という言葉が一般に、ある集団と他の集団を識別する「人類学的な用法」(用法Ⅰ)、そして集団内部の価値観や慣習が高級であることを示す「文学的な用法」(用法Ⅱ)に大別して二つの用法で用いられていることを指摘する。しかしながら、いずれも一つの文化を定義するという行為そのものが抑圧と非抑圧の境界線を引く行為であり、すぐれて恣意的であり、また政治的である点

を指摘する¹³⁾。文化の流動性を考慮するならば、一つの集団が一つの同じ価値観や慣習を共有するとは言えないし、世界の歴史の流れは文化的な同質化ではなく、逆に差異化や複合化へと向かってきたのである。ウォーラステインに拠れば、国民国家こそが、このような遠心化のプロセスがもたらす言わば「バベルの塔」のような完全な文化的なアナキーへの傾向に抵抗して、逆にその組織化を行う求心力として作用したのである。つまり、国家間システムは地球規模にまで発展したが、そのプロセスは国家を単位とするシステムを構築するのみならず、同時に諸個人と国民国家のあいだの関係性も規定したのである¹⁴⁾。したがって、たとえ当初は国民文化が存在しなくとも、国家が政策と資源の独占を通じてそれを形成するのは時間の問題であった。また、なかでも資本主義世界経済の周辺地域においては経済的な効率化の推進や近代化エリートの政治的な安全保障のために、強制的に文化を変化させる圧力を伴うものでもあった¹⁵⁾。

世界システムにおける文化の問題について議論する場合には国民国家のみならず、世界経済が文化に及ぼす影響について検討する必要がある。近代世界システムは「資本主義世界経済 (capitalist world economy)」を前提としているが、それは世界規模での分業体制を伴うものであり、商品・資本・労働力などの流動性を前提条件とするために、国家の境界線には浸透性が必要とされる。だが、それは国民文化の創出という国家目標とは対立するものであり、日常生活においても見出されるような文化の国際化をもたらしている。また、労働力の移動についても高所得の職業と低所得の職業の二つのレベルにみられる異なった特徴に着目する必要がある。前者の場合には、通常は豊かな国から貧しい国への移動であり、同化することもなければ、同化を求められることもない。高い学歴や専門知識をもち、一時滞在者でしかない彼らは集団となって自らを世界文化の担い手であると考える傾向にある。他方、後者の場合には、貧しい国から豊かな国への移動であり、定住を希望するものの、同化をめぐる激しい対立が引き起こされる傾向にある。彼らは少数者として存在するが、このような少数者集団は今日では増加の傾向にある¹⁶⁾。

ウォーラステインに拠れば、近代世界のナショナリズムはシステムへの参加や普遍的なものへの同化、また異質なものの除去を求めると同時に、システムからの離脱や個別的なものへの固執、また差異の再創造を求める「両義的な」ものであっ

た。つまり、それは個別主義 (particularism) を通しての普遍主義 (universalism) であり、普遍主義を通しての個別主義であった¹⁷⁾。したがって、この世界の内部に同質的な世界と独自の国民文化を同時に創出する弁証法が存在するのと全く同じように、ひとつの国民国家の内部にも同質的な国民文化と独自の民族集団あるいは「少数派」を同時に創出する弁証法が存在するのである。だが、一つの世界への指向性と独自の国民国家への指向性、また一つの世界への指向性と各国内部での独自の民族集団への指向性といったこれらの二つの弁証法には一つの決定的な相違が存在する。それは双方の矛盾において常に国家が優位にあった点である。国家は物理的な力を掌中に収めてきたが、一方では文化的な多様性を創出するために、他方では文化的な画一性を創出するために、その力を行使してきたのである。つまり、国家は近代世界において文化的に最も強力な結束力を行使するとともに、最も強力に分裂化を推進する存在であった¹⁸⁾。

さて、ウォーラステインは世界システム内部に存在する矛盾を隠蔽するためにこれまで普遍主義と人種 (と性) 差別主義が一对の有用な保守的なイデオロギーとして機能してきたと主張する。戦後の世界に拡散した「開発至上主義 (developmentalism)」においては、一方ではあらゆる国家は発展可能であり、発展すべきであるという普遍主義が唱えられる。だが、他方では発展が遅々として進まない原因を人種主義の観点からその国の (合理的・個人主義的ではない) 文化的な問題に、つまり国家レベルについては用法 I の文化、世界レベルでは用法 II の文化に、それぞれ発展を阻害する原因を求めるのである。さらに、開発至上主義は前述の少数者集団に代表されるような人々を各国家を計測単位とする統計から排除することで、世界システム内部の分極化の現実を歪曲・隠蔽するとともに、経済における科学の増大と政治における同化を推進するものであった。なかでも、同化は弱者に対して強者のモデルに従うことを強制するものである。ウォーラステインに拠れば、「統計 (statistics)」という言葉が「国家 (state)」に由来していることは決して偶然ではない¹⁹⁾。このような科学と同化の追求は、ウォーラステインの言葉を用いるなら、「リベラルの夢の実現 (fulfillment of the liberal dream)」であるが、このような夢は大規模な「反システム運動 (antisystemic movements)」である1968年の世界的な文化革命によって揺り起こされたのである²⁰⁾。

近代世界システムにおいては文化は強者の武器であることが多かったが、このようなエリート支配的な文化に対して弱者の側からも文化的な抵抗を試みる場合も少くはなかった。ウォーラステインはこれらの文化的な抵抗を「計画的な形態」と「個人主義的な形態」の二つに分類する。だが、計画的な文化的抵抗は概ね二つの方法を通じてシステムの内部に吸収される。つまり、ひとつはそれらを商品化することで文化的な抵抗行為を無力にする方法であり、また他方はそれらの流通のためにネットワーク化された市場を創出して本来私的な領域にあったものを公的な領域へと転換する方法である。このような計画的な抵抗に比べて、個人レベルの抵抗は当局者にとっては管理が困難であり、容易には吸収されない。だが、個人的であるが故に組織化されることもなく、弾圧は厳しいものとなる。さらに、諸個人の抵抗が他者とのどのような意味で文化を共有するのか、言い換えれば、それを真に文化的抵抗と呼び得るのか、という問題も残される。ウォーラステインに拠れば、現在の文化についての関心は社会の進歩と個人の解放の場としての、経済・政治の領域に対する信頼の失墜に起因するものであり、文化とアイデンティティはそれらが方向性を取り戻すことを助ける手段であるとされる。だが、ウォーラステインは彼自身がこれまで「社会主義世界政府 (socialist world government)」と呼んできた資本主義世界経済の後に想定される未来においては、国民国家の消滅のみならず、国民文化そのものも消滅するのだろうかかと自問しながらも、その答えについては明言を避けるのである²¹⁾。

このような議論に対して、R・ボイン (Roy Boyne) はウォーラステインの文化をめぐる考え方がこの史的システムにおける矛盾や曖昧性、また複合性に対応する形で発展してきたその一連の概念の一部でしかないことに反論を試みる。つまり、世界システム論という客観的な理論的な構成物の視座から世界を捉えようとするウォーラステインにとっては、あらゆる文化は単なる派生物としか考えられていない、と論じることもできるのである。ボインは世界システムについての理論がガラスの入っていない窓や燃料のない暖炉などを備えた家のようなものでしかないと強く批判する²²⁾。

ボインの批判の是非はともかく、ウォーラステインは資本主義世界経済が文化的な普及・伝播をもたらすと説くが、この点について経済的なものを過度に強調し

ているとの批判が寄せられている。だが、真に解き明かす必要があるのは、どのようにしてそれが起こるか、である。つまり、どのような条件が文化生産を可能にし、またどのような環境において文化的抵抗が可能とされるか、という点についての議論が欠落しているのである²³⁾。いみじくも、J・ネデルフェーン・ピーテルセ (Jan P. Nederveen Pieterse) が指摘するように、世界システムについての概念構造とそれが社会変動や社会的行為を理論化する方法の関係が疑問とされるのである。ネデルフェーン・ピーテルセは世界システム理論について、システム理論をもたない世界システムについての理論である、と批判している²⁴⁾。また、ウォーラーステインは、「南」の世界の分極化といった世界システムにおける四つの再編の動きを指摘し、なかでも反システム運動の変貌を最も重要視している²⁵⁾。しかし、一般論として世界システム論のような構造論的なアプローチにおいては、行為者の意味は見失われがちである。例えば、ウォーラーステインはベルリンの壁の崩壊に見られる「1989年革命のリハーサル」として1968年革命を取り上げているものの、反システム運動として一括される文化闘争のそれぞれが掲げていた運動理念（のあいだの矛盾や対立）などを捨象する傾向にあり、構造論的な必然性の帰結としてこれらの運動の収斂を予期するのである²⁶⁾。

だが、世界システム論に内在する経済主義が繰り返し批判されてきた経緯を考え併せるならば、むしろウォーラーステインが文化の問題を前面に据えて議論していること自体が興味深いものであるが、おそらくその契機の一つとして、上記のネデルフェーン・ピーテルセ、また以下に論じるロバートソンやハンネルズなどの文化的な要因を重視する研究者からの批判が出現したことを指摘できる。

III 世界システム論の経済主義への批判

ウォーラーステインの議論の基底にある経済主義に対する代表的な批判としてロバートソンによる論考を取り上げることができる。ロバートソンはアイデンティティ表出の問題について考えるにあたって以下の二点との関連性を明らかにする必要性を指摘する。第一はグローバルな規模で影響を及ぼすプロセスへの反応とその文化的な次元との密接な関連性であり、第二に世界システムとの関連性である。こ

これらの点について一般的、理論的な議論を進めるうえで、まずグローバルな文脈における普遍主義と個別主義の問題について論じる。ロバートソンの基本的な関心は、ますます圧縮される世界においてこれまで国民（一国）ごとに構成されてきた社会が多文化主義や多民族化など国境の内外から制約を受ける主体になっており、その結果、自己／他者をめぐる個人的、また集合的なアイデンティティの条件がますます複合化していく点にある。このようなグローバルな凝集化と複合化がもたらす最大の問題として「相対主義 (relativism)」と「世界主義 (worldism)」の問題をとりあげる。ロバートソンに拠れば、相対主義が問題のいかなる一般的な普遍化を拒むのに対して、世界主義は世界をひとつの総体として分析的に把握することが可能であると考えた立場である。したがって、ウォーラステインの世界システム論も世界主義の考え方に依拠したものであるが、その経済領域に力点を置き過ぎるきらいがある²⁷⁾。

ロバートソンは、ウォーラステインと同様に世界の文化的な同質化について批判するものの、ウォーラステインの議論に内在する機能主義的、功利主義的、また物質主義（唯物論）的な還元主義を批判して、対照的に経済を第一義的な要因としては考えないアプローチを採用する。つまり、ウォーラステインが文化を単なる「付帯現象 (epiphenomenon)」として把握するのは対照的に、ロバートソンの用語である「主意主義的な世界システム理論 (voluntaristic world-system theory)」においては、政治や経済から独立したグローバルな文化の独立したダイナミクスと近代世界システムにおける文化的な多元主義が重視されるのである。これらの相違からは、理論の指向性についても対立点を指摘できる。つまり、ウォーラステインが客観主義的で構造－機能主義的な「システム理論」を指向するのに対して、ロバートソンは「主意主義 (voluntarism)」的な理論を指向する。それは人間の行為の役割と主観性を重視する点で、ウォーラステインとは対照的である²⁸⁾。

さて、ロバートソンは20世紀末において見られる大規模な二元的なプロセスとして、「個別主義の普遍化 (the universalization of particularism)」と「普遍主義の個別化 (the particularization of universalism)」の相互浸透 (interpenetration) を指摘する²⁹⁾。つまり、現代の消費主義的なグローバルな資本主義はグロー

バルな規模での普遍主義的な供給とローカルな個別主義的な需要、つまり個別性と普遍性を結びつけている。したがって文化的な差異を考慮して特定の地域、民族、またジェンダーに向けて専門化した「ミクロのマーケティング (micro marketing)」にみられるように、現代の市場が文化と経済の相互浸透に関わっている点を主張するのである。そして、「普遍主義 — 個別主義 (universalism-particularism)」の問題について興味深い点として、以下の二つが指摘される。まず第一に、それは概ね宗教文化的な伝統に関連して展開してきた問題であるが、日本の仏教や儒教の受容において修正が施されたように、普遍的なものを個別化することやそのプロセスの所産を世界へと戻すことなど、異文化のアイデアの選択的な吸収や融合は長い歴史を有している。そして第二に、近年の世界史において普遍主義—個別主義の問題はグローバルな文化の形態、「総体としての世界の構造化 (the structuration of the world-as-a-whole)」の主軸となるものを構成してきたのである。したがって、個別主義がローカルなものに、また普遍主義があらゆるものに適用されるのであると単純に考えるのではなく、これら二つをグローバルな規模での文化的な結びつきとして考える必要性が指摘される。この点は現代のグローバリゼーションを二元的なプロセスの制度化として考えることを示唆するものである。たとえば、現代のグローバリゼーションへの抵抗の例として、イスラム復興運動、つまりいわゆる「原理主義」をあげることができる。それは単に一つの同質化されたシステムとしての世界に対する反抗であるのみならず、文化的に平等で相対化された世界という概念への反抗としてもみなすことができる。第一の側面は反近代を、第二の側面は反ポストモダンを、それぞれ指向するものである³⁰⁾。

さらに、現代のグローバリゼーションを議論するうえでの基本的な参照点として、ロバートソンは、国民 (一国の) 社会 (national societies), 個人 (individuals), 諸社会から成る世界システム [国際関係] (world system of societies [international relations]), 人間 (humankind) の四つの要素をとりあげる。ロバートソンに拠れば、グローバリゼーションは「グローバルな人間の条件 (global-human condition)」についてのこれらの四つの要素の主題化を伴うものである。そして、これらの要素は相互に関連して、他の要素を相対化して抑制する影響力を及ぼす。20世紀後半のグローバリゼーションは個別主義の普遍化と普遍主義の個別

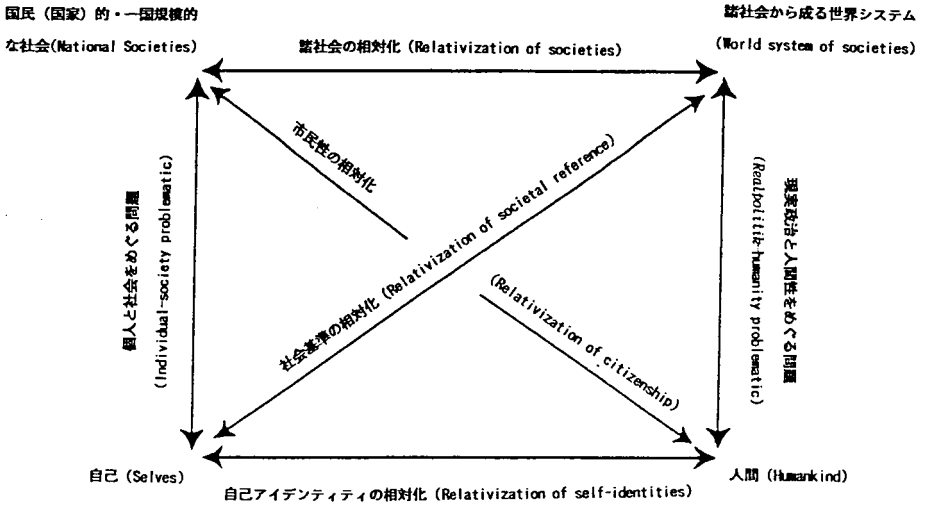


図1：ロバートソンによるグローバリゼーションのモデル

出典：Roland Robertson, *Globalization: Social Theory and Global Culture*.
 London: Sage, 1992, p.27.

化の双方の制度化を伴っており、とくにそれは個人的なものの制度化に深く関わっている。世界の政治文化はライフコースについてのグローバルな規模での制度化をもたらしており、このような制度化の多くは国家構造によって媒介されるものであるが、国際的な非政府組織（NGO）もまた同様に教育問題や人権問題、さらに女性問題などの領域においてグローバルな広がりでも個人主義を媒介し、促進しているのである³¹⁾。

このような視点からは、旧来の社会理論に対する批判は不可避なものとなる。ロバートソンはこれまでの社会理論が総体としての世界について論じるうえで不適切であった点を厳しく批判している。つまり、そこでは国民（一国）ごとに構成された社会と個人の問題に力点が置かれ、歴史的な現象としてますます重大なものとなっているグローバリゼーションの問題についてはほとんど扱われてこなかったからである。旧来の社会理論においては、各々の社会は一つの中心的な価値体系に基づいて独自の集合的なアイデンティティを発展させることが前提とされており、こ

のような考えは広く非西欧社会にも影響を及ぼしたのであった。また、このような近代性をめぐる社会理論の影響は1950年代末から60年代初頭の近代化理論においても見出されるものであるが、それらはグローバリゼーションについて、とくにその文化的な次元について検討することもなく、単なる比較研究の域を脱することができなかつたのであった。ロバートソンは現在では改善の努力が見られるものの、これまで社会学が社会「外部」の問題に不注意であつたのみならず、今なお社会「間」の問題についてグローバルな視座を欠いたまま扱っていることに厳しい批判を加えるのである³²⁾。

近年の議論においてロバートソンは、グローバリゼーションとローカリゼーションの二つの用語を圧縮化した「グローカリゼーション (Glocalization)」という日本語に由来のある言葉を取り上げて、世界の同質化／異質化への傾向が同時進行の表裏一体のものであり、一つのプロセスの二つの側面である点を指摘している。つまり、グローバリゼーションはローカルなものをすべて抹消するのではなく、そのプロセスにおいてこそローカルなものが浮かび上がってくるのである。これは普遍性と個別性の相互浸透に関連する問題でもある³³⁾。だからといって、ロバートソンはナショナルに構成された社会が衰退しつつあることを論じているのではない。これらの国民（一国）的な社会を分析する際に前提とされてきた一つの国民国家に一つの国民文化という仮説こそがグローバルな文化を考えるうえでの障害となっており、むしろこれらの社会の文化はグローバルな文化の一部としてとらえる必要性を強調する。このように特定の社会の文化はグローバル・システムにおける他の社会との相互作用の帰結である。文化的に結合した国民（一国）的な社会という考え方に固執するならば、ひとつの総体としての世界がグローバルな状況によってますます組織化されるようになってきている点を見落とすことになるのである。

このようにロバートソンは、人々の生活や社会に深く浸透して影響を及ぼすグローバリゼーションについての人々の意識とそれに対する反応に基本的な関心を寄せている。したがって、ロバートソンの議論においては「個人」が過度に強調される傾向にあり、民族や人種（さらにジェンダー）といった視点が弱いと言わざるを得ない。さらに、グローバリゼーションがもたらす社会的な影響、とくに第三世界と呼ばれる周辺部の社会に対する影響についてはあまり言及されてはいない³⁴⁾。そ

ここで、実際にグローバリゼーションが周辺部の社会に与えている影響を考えるために、グローバルな文化の流れについて検討する必要がある。

IV 同質化と異質化をめぐる二つのシナリオ

それでは、グローバリゼーションは周辺部における文化的・社会的・経済的な変化のプロセスに対して実際にどのような影響を及ぼすのであろうか。ハンネルズは早い時期からウォーラーステインの世界システム論における文化の不在を批判してきたが³⁵⁾、この点について西アフリカなどの具体的な事例を取り上げて、世界システムにおける周辺部の文化の行方について論じている³⁶⁾。これまで論じてきたようにグローバリゼーションは政治経済のみならず、文化についても指摘できるものであるが、多くの場合には文化の「グローバルな同質化のシナリオ (global homogenization scenario)」が議論されている。それは西欧の後期資本主義によって世界規模で拡張される消費社会にますます周辺が依存する結果、中心からの商品化された文化の一方的な流れが周辺の文化的な同質化をもたらすというシナリオである。したがって、この見解によれば、同質的な世界文化は概ね現代西欧文化の焼き写しとなり、ローカルな文化の消失は周辺において最も顕著なものになると想定される。

だが、ハンネルズはこのようなシナリオについて以下の三つの知的なバイアス(偏向性)を指摘する。第一は、エスノセントリズムであり、このような議論は単に滅び行く他者を嘆き悲しんでいるだけであり、その生存と向かい合うことを避けようとするものである。第二に、同質化シナリオは中心に火種のある論争のために周辺から燃料を補給するものである。つまり、近代性をめぐって激しい議論が闘われている先進国の論壇において、周辺の生活環境に関心を抱く人々は市場経済の影響をとりあげる傾向があるが、このようなシナリオは単に論争の輸出を助けるものでしかない。第三の問題は、このシナリオがいくぶん麻痺した時間感覚に依っている点である。このシナリオは周辺の文化が中心の文化との遭遇にはまったく無防備であり、今もなお周辺にはその用意ができていない点を前提としている。だが、それは中心と周辺のあいだの歴史的な展開を無視している。というのも、第三世界の

人々の意識のなかの第一世界は、第一世界の多くの人々の心のなかの第三世界よりもずっと永きに渡って存在してきたのである。中心と周辺文化が突然に結びつくという考え方は、実際のところ概ね、中心に暮らす我々の多くがグローバルな現実が遅ればせながら気がついたことの想像的な副産物でしかないのである³⁷⁾。

したがって、現代において確かに一つの世界文化が存在するものの、それは複製のように画一化されたものではなく、むしろ多様性が組織化されたものとして考える必要性が強調される³⁸⁾。このような知的に偏向したグローバルな同質化のシナリオに対置されるものとして、ハンネルズは「周辺転化シナリオ (peripheral corruption scenario)」を提示する。それは周辺が知識や制度を中心から取り入れるものの、すぐにそれらを自らに見合ったものへと転化するというシナリオである。つまり、中心は周辺では勝利できず、また最終的な勝利を取めることもないというものである。このようにハンネルズは差異の形成に力点を置いてグローバリゼーションのプロセスにおける文化の包括的な概念化を試みる。彼に拠れば、文化とは人々のあいだの意味の「流れ (flow)」であり、意味の流れを包括的に説明するために、以下の四つの社会的な枠組みを指摘する³⁹⁾。

まず第一に市場 (market) をあげることができる。文化商品は市場の枠組みのなかを移動し、またあらゆる商品は何らかの意味を伴うものである。だが、グローバルな同質化のシナリオは市場の枠組みのみに依拠しており、他を考慮に含めていない点から不完全なものである。

第二の枠組みは国家 (state) である。領域を支配する国家は文化を空間的に規定する既得権益を保持している。国家はその正統性を獲得するために、多様な方法で意味の管理に係わっており、国民をそれぞれの歴史や伝統に結び付けるために意味の安定化を図る。だが、周辺の国家の多くは文化政策を遂行するうえで極めて限られた能力しかもっておらず、中心からの自由な情報の流れに対して抵抗する傾向がある。というのも、グローバルな同質化のシナリオにみられるように、市場の枠組みにおいては領域と文化との絆が弱められ、国境が無視され、無価値にされることが予想されるからである。

第三は生活形態 (form of life) である。それは生産や再生産の日々の慣習、つまり労働・家事・居住といった活動に関するものであり、人々の単なる行いが自由

で互酬的な文化の流れを伴う点で極めて重要なものとされる。これらの日々の活動は実際に物質的な環境に依拠しているため、その環境に変化が無い限り、文化にも変化はもたらされない。周辺の社会は国際的な分業のなかに組み込まれているが、都会のビジネスマンと農民の生活の相違にみられるように、人々の生活形態には職業に応じて文化的な自律性の余地が残される。

第四は運動 (movement) である。グローバリゼーションが現代の多様な運動の高まりに重要な影響を及ぼしていることは否定できない。特にこの約25年のあいだに女性・環境・平和などの近年の大きなトランスナショナルな運動が高まりを見せているが、どちらかと言えば、それらは中心-周辺ではなく、むしろ中心-半周辺のあいだに組織されている。国家、市場、運動といったこれら三つの枠組みは生活形態がそれらに開かれていることを要件とするものである。さらに、国家がある場合には市場と競合し、また民族運動が自らを国家へと変貌させてしまうことは少なくはないし、いくつかの運動はその報道価値ゆえに市場のなかで商品化される可能性もあるなど、これらの枠組みは背反する傾向を内包しながらも相互に関連するものである。

さて、ハンネルズは周辺の文化の将来についてのシナリオとして以下の二つの傾向を指摘する。一つは「飽和の傾向 (saturation tendency)」であり、もう一つは「成熟の傾向 (maturation tendency)」である。前者がグローバルな同質化シナリオから導き出される見解であるのに対して、後者は周辺転化シナリオとの親和性を有するものである。これら二つのシナリオは現実生活においては必ずしも二者択一のものではないが、ハンネルズは無条件にグローバルな同質化のアイデアである飽和に抵抗するとともに、成熟に力点を置いている。第一の飽和の傾向は周辺文化が徐々に輸入された意味や形態に同化して、やがて中心と区別がつかなくなり、これまで保護されてきた文化的な差異も遅かれ早かれ消え去るものとされる。これとは対照的に、第二の成熟の傾向は市場によって支配されるのではなく、逆に市場の枠組みを植民地化するものである。たとえば、当初は周辺において上映される映画はすべて米国において既に商業的価値を喪失したハリウッド製の旧作の安価な輸入品であった。だが、このような「文化的ダンピング (cultural dumping)」の状況から今日では圧倒的に現地製作の映画が輸入物に代わるようになったのである。この

ような変化をもたらしたものは第三世界の民衆文化の企業であったが、それらは現地で自らに特有の文化的な感性を利点として、文化商品の市場の隙間を開拓するのである。言い換えれば、市場の枠組みのなかでは、同じ単一の製品に広汎に同質化する傾向のみならず、個別化された製品のための特定の隙間 (niche) を創出するオルターナティブも存在するのであり、周辺文化はまったく無防備ではないのである⁴⁰⁾。

このような視角からハンネルズは周辺の文化が中心の文化とのあいだで相互作用を引き起こす結果、周辺文化がハイブリッド化 (hybridization) される点を指摘する。つまり、周辺における各々の社会はなおも文化的な独自性を有するものの、もはやかつてほどには絶対的なものではない。このような中心と周辺のあいだで歴史的に累積されてきた、また現在も継続中の文化的連関性を描写するものとして、「クレオール化 (creolization)」という言葉が用いられる。「クレオール (creole)」と「クリエイト (create: 創造)」という言葉のあいだの類似性は偶然ではなく、言語同様に、文化は歴史的に純粹で同質的ではなく、むしろ複雑に混ざり合った起源を有している。さらに逆説的ではあるが、世界文化といったコスモポリタンのものの規定がローカルなものに従属している側面も指摘できるのである⁴¹⁾。さらにハンネルズは、国家が中心からの文化の大規模な輸入者であると同時に周辺の真正的な伝統の保護者という二つの側面を有しており、自らの正統性のために伝統に傾く傾向にあるものの、自らが「クレオール国家 (creole state)」であることを自覚する必要性を指摘している⁴²⁾。

したがって、人々の生活や社会に深く浸透して影響を及ぼすグローバリゼーションについての意識とそれに対する反応に基本的な関心を抱くロバートソンとは対照的に、ハンネルズは周辺部の実際の社会・経済的なプロセスを議論の中心に据えている。さらにハンネルズは、労働力、商品、市場といった経済的な次元が多様な共同体のあいだの文化関係のプロセスに及ぼす影響に主な関心を抱いており、それを検討するうえで世界システム論の語彙を借用するものの、世界経済の構造については不可知論 (agnosticism) の立場にある。この点でハンネルズの視座は、現代世界の相互連関性を構成する経済・政治の諸関係から世界システムの構造の理解に努めるウォーラーステインともまったく異なっている。

しかしながら、いみじくもネデルフェーン・ピーテルセが指摘するように、ハンネルズの指すクレオール文化とはあらゆる文化に該当するものではないのだろうか？言い換えれば、クレオールではない文化など存在するのか、という点に疑問が残される⁴³⁾。さらに、J・アブ・ルオド (Janet Abu-Lughod) は周辺の創造力を評価するハンネルズの議論においてすら、周辺が中心からの文化の流れを一方向的に受け入れる存在としかみなされていない点を批判する⁴⁴⁾。というのも、S・ホール (Stuart Hall) が以下において詳細に指摘するように、実際には中心から周辺へのみならず、周辺から中心へと向かうもっと多くの流れが存在するのであり、文化製品のグローバリゼーションにおいては対象化の二元的なプロセスが続いているからである。

B・アボウ・エル・ハジ (Barbara Abou-El-Haj) もまたアブールオド同様に、ハンネルズの議論においては周辺が受動的な存在として描かれていることを批判したうえで、不平等な交換に満ちた世界における平等な交換について考えるためには、ハンネルズの四つの社会的な枠組みにおける運動のカテゴリーについてさらに議論が展開される必要性を指摘する⁴⁵⁾。この点は極めて重要である。というのも、ハンネルズは文化越境や文化変容に深い関心を抱きながらも、一体いかなる条件の下でそれらが運動を引き起こすのか、といった点にまで踏み込んでいないからである。また現実の周辺の社会や「他者」に対する認識にもたらす影響についてもさらに議論が必要とされよう。これらの点を考える上で、グローバルな変化とローカルな変化の相互作用に同時に着目する必要がある。もちろん、ここで指摘されるローカルな変化とは、諸個人の内面に关わるアイデンティティや諸個人を取り巻く文化をめぐる変化である。

V グローバリゼーション・文化・アイデンティティ

カルチュラル・スタディーズの旗手であるホールはひとつの世界的なプロセスとしてのグローバリゼーションとその帰結について、文化とアイデンティティの問題を中心にローカルな変化とグローバルな変化の相互作用について興味深い議論を展開している。グローバリゼーションのプロセス自体は長期に及ぶ歴史のなかに位置

づけられるものであるが、ホールは英国文化の形成プロセスを考察することから現在の議論の焦点であるグローバリゼーションの問題を議論する。ホールに拠れば、カルチュラル・スタディーズの開祖とも呼ばれるE・P・トムソン (Edward P. Thompson) やR・ウィリアムス (Raymond Williams) が英国の社会史研究を進めるうえで、英国の社会や文化の形成について植民地からの影響を考慮に含める必要があり、英国という一国規模の枠組みで議論することを疑問視していた点から、グローバリゼーションは英国文化研究の視点に立つならば決して目新しい問題ではないものとされる⁴⁶⁾。つまり、かつての覇権国であった英国国家とその国民文化もグローバリゼーションの進展のなかで興隆し、衰退したのであり、このプロセスを考慮すること無しには英国文化の形成を考えることは不可能だからである。また、この時代においてこそ、文化的に明確な「英国的なもの (Englishness)」のアイデンティティが構築されたが、それは常に自らを同質的な実体として提示するためにあらゆる差異を吸収する必要に迫られるものであった⁴⁷⁾。

だが、グローバリゼーションのプロセスにおいて、ひとつの国民的な文化アイデンティティとひとつの国民国家という一対一の相関性はいまや消滅しつつある。一般にグローバリゼーションの進展を示す代表的な例として多国籍企業の展開が指摘されるが、戦後世界を通じて莫大な数にのぼる移民労働者が存在したことも無視できない。グローバリゼーションの進展は国民国家・国民経済・国民文化のアイデンティティを浸食しているが、ホールはこれを極めて複雑で、かつ危険性を孕む事態としても捉えている。というのも、グローバリゼーションの進展によって国民国家が動揺し始めるとき、国民文化は人種主義などの排外主義的な思想や運動によって極めて闘争的、また防衛的なものへと退行する傾向が一般にみられるからである⁴⁸⁾。このような国家の相対化、あるいは弱体化への反応として、国民国家の「上」と「下」への二つの指向性が同時に見出される。つまり、同じ運動の二つの側面であるグローバルなものとローカルなものが同時に見出されるのであり、それらをグローバリゼーションの新しい形態として指摘できる。なかでも、近年議論されている新しい種類のグローバリゼーションは、文化的には「グローバルな大衆文化 (global mass culture)」に関連するものであり、その点で英国にみられるような国民国家や国民文化に関連するものではない。つまり、「英国的」ではなく、「米

国的」なものである。グローバルな大衆文化は文化生産の近代的な手段によって支配されている。つまり言語的な境界を急速に容易に超越し、もっと直接的に言語を越えて語るイメージによって支配されているのである。それらは典型的には、衛星放送のテレビや映画、また商品広告といった専ら視覚に訴える映像メディアの形式を通じて直接に大衆生活に浸透している。もちろん、このような浸透に対して受け手の人々や受入国の当局とのあいだに多くの文化摩擦を引き起こしがちであるが、原理的にはいかなる国境によっても制限されないものである⁴⁹⁾。

さて、グローバルな大衆文化は多様な特徴を持つが、ホールは以下に示されるような二つの特徴を指摘する。第一に、それらが今もなお西欧中心的であることを指摘できる。それらは西欧社会に集中した技術と資本を用いて西欧社会の物語と創造物を普及しているが、それらはグローバルな大衆文化を推進するための役割を担っており、その意味で西欧中心的である。第二に、グローバルな大衆文化の重要な特徴として文化表現の同質化を指摘できる。もちろん、それらがもたらす同質化は絶対的に完全なものではなく、また完全な同質化のために作用しているわけではない。したがって、新しいグローバルな経済・文化的な力は、多国籍ではあるが、脱集権的・脱中心的なものである。さらに、それは単なる大量生産と大量消費の論理に立脚して大量の受容者・消費者を対象とするものではなく、小集団や個人に対して作用する極めて柔軟な資本蓄積のために形成されるレジームである⁵⁰⁾。

それでは、グローバリゼーションとは西欧による最終勝利と歴史の幕引きを単に意味するのであろうか。ホールはグローバリゼーションのプロセスが「グローバル・ポスト・モダン (global post modern)」をもたらしめている点を指摘する。つまり、資本はグローバルな地位を維持するためには常に差異との折衝を経る必要性があった。ホールが「折衝 (negotiation)」という言葉によって意味するものは、資本が克服の対象である差異を吸収し、また部分的にそれを反映することであり、結果的には多様性を含んだ一つの世界を構成することに努めることであつた。だが、グローバリゼーションを単に何ら問題も矛盾も伴わないものとして見做すべきではない。というのも、エスニック・フードを食べることがカルカッタではなくマンハッタンにおいて食べることを意味するように、このプロセスは世界を通じて均等にかつ平等に進展するものではないからである。多くの場合には、グローバリ

ゼーションはレジームの内部で、またディスコースの内部で生じていることについて語られており、その外側で、つまり周辺で生じていることについては語られないからである。したがって、ホールはグローバリゼーションの帰結を既知のものとして捉えたり、またそれが議論の余地もなく、また矛盾など存在しないとする考え方について極めて批判的である。グローバリゼーションは単一の平和的で穏やかなプロセスではなく、極めて矛盾に満ちた空間をもたらすものとして考える必要がある。言い換えれば、グローバリゼーションは常に挑戦され、常に矛盾を伴うものとして考えられるのである⁵¹⁾。

ホールはローカルなもの視点からこの不均等なプロセスを検討するために、グローバリゼーションの内側で今もなお相互に闘争している二つの方向性について論じている。一つは極めて防衛的で閉鎖的な方法で、ナショナリズムや国民（一国）的な文化的アイデンティティに回帰することを説くものである。もう一つは差異と共存すると同時に、それを克服・吸収しようと努めるものである。なかでも、ローカルなものへの回帰はグローバリゼーションへの一つの反応である。つまり、グローバリゼーションのプロセスはあまりにも巨大で包括的であり、これに対処する術を知らない人々は小さな空間への回帰を求めるのである。逆説的ではあるが、現代においては周縁部が初めて自己について語る手段を獲得した結果、それが徐々にではあるが、以前に比べて強力な空間となりつつある。このように現代社会においては権力のディスコースや支配的なレジームのディスコースは、これまで排除されてきた周縁的なものやローカルなものや文化的なエンパワメントによって確実に脅かされている。ローカルなものや周縁的なものの主体性はそれらの隠された歴史を恢復することを通じてのみ表出することが可能である。つまり、それらの歴史がトップ・ダウンの形式ではなく、ボトム・アップの形式で語り直される必要があり、女性や黒人の運動はこれまで隠蔽されてきた彼らの歴史を恢復すること無しには到底理解できないものである⁵²⁾。

これらの運動について、つまり隠蔽されていた歴史が語り直されることについて考えるうえで、アイデンティティの新たな形態について議論を進める必要がある。つまり、それは同一性ではなく、差異を通じて構築されるアイデンティティである。ホールは現実の社会においても社会科学においてもこれまで参照点とされて

きた国民国家や国民経済が相対的に衰退して不安定になるにしたがって、旧来からの大規模で全包括的な、また同質的で画一化された集合的なアイデンティティも浸食されており、今日では断片化を余儀なくされていることを指摘する。階級や国民といった集合的な社会的アイデンティティは消滅してはいないものの、実際にはかつてそれらが近過去において世界の概念化について果たしてきた程には社会的、歴史的、認識論的な役割をもはや担ってはいない。今なお左派はこのような古いアイデンティティの考えに固執する傾向が見られるが、このような古いアイデンティティの論理は既に終焉したのであり、巨大で集合的な社会的なアイデンティティをもはや同質な形態においては考えることなどできない。これらの集合的な社会的アイデンティティは近代世界をもたらしてきた巨大な長期的な歴史的プロセスのなかで形成され、これまで安定的なものとして考えられてきた。だが、現代においてはもはやそれらは既成の全体性や安定性を何ら保証されてはいない。このように、ホールは集合的な社会的なアイデンティティをグローバリゼーションという歴史的なプロセスとの関連で捉える⁵³⁾。

閉ざされた全体性ではないアイデンティティを考えるうえで、ホールは複数のディスコースから構成され、また矛盾を含んだアイデンティティについて考えることを重視する。というのも、アイデンティティは常に形成途上の、開かれた、また流動的で不確実なプロセスにあり、それは完成するものでなければ、完結したものでもなく、また外側からの押しつけによって無理矢理に形成されるものでもないからである。たとえば、英国のアイデンティティの象徴である紅茶はスリランカやインドのプランテーションの生産に依拠したものであり、茶のプランテーションは英国には一つも存在しない。茶が英国史という内側の歴史の外側に置かれているように、他者の歴史無くしては英国史は存在しないのである。このように歴史全体を捉えるうえで、これまで語られていない沈黙は極めて重要である。というのも、語られ得るすべてのものは、まだ聴かれたことのない、あるいは聴かれ得ない抑圧された無数の声のうえに存在しているからである。このようなディスコースの二重性、つまり自己にとっての他者の必要性は明らかなものとされる⁵⁴⁾。

ホールは自らの経験に依拠して、1950年代から60年代にかけての戦後移民の時代における黒人のディアスポラの形成をとりあげ、それが英国の社会・経済・政治を

変容してきた点を指摘する。黒人移民の第一世代が英国に定住し始めた70年代には、人種主義の高揚のなかで、それに対抗して防御的な集合的アイデンティティが黒人のあいだに構成された。それは彼らが多数派の国民の内部で排除され、拒絶されていた結果、自らが依拠する何か他のルーツを探し出す必要性に迫られたものであった。また同時に、それは失われた歴史を回復する作業でもあった。語られることもなく、学校でも学習されず、本にも載っていない、彼らが回復せねばならない歴史である。だが、過去は彼らがアイデンティティを回復するために待っているわけではない。つまり、過去は常に「再」発見され、未来のために「再」発明されるのである。言い換えれば、アイデンティティは発見されるために過去に存在するのではなく、構築されるために未来に存在するのである。このような政治的アイデンティティを想像すること無しには、カウンター・ポリティクスは構築されないのである⁵⁵⁾。ホール自身、英国へ移民する以前にジャマイカに暮らしていた頃、「黒人」と呼ばれたことも呼んだこともなく、黒人という言葉は初めて聞いたのは植民地解放闘争や公民権運動が高まった時代であった。ここで「黒人」とは生物的・人種的なカテゴリーではなく、あくまで歴史的、政治的、文化的なカテゴリーである。つまり、彼らは肌の色故にではなく、頭のなかにおいてこそ黒人なのである。したがって、黒人はある歴史の瞬間にひとつの政治的なカテゴリーとして創出されたのである。たとえば、ジャマイカでは70年代になって初めて人々は自らを黒人として認識したのであった。それは意義深い文化革命であったし、いかなる政治的な革命よりも偉大なものであった。レゲエ音楽の旗手であった故にかつてボブ・マーリー (Bob Marley) が多くの政党からの支持を求められたように、政治はそれに追いつくことができなかった。つまり、政治が文化を正統化するのではなく、文化が政治を正統化したのであった⁵⁶⁾。

このような考えは70年代の英国の反人種主義闘争において、「文化の政治 (cultural politics)」,あるいは「アイデンティティの政治 (identity politics)」としてのブラック・アイデンティティの問題に極めて重要な影響をもたらした。それは1950年代から60年代にかけてカリブ海や東アフリカ、またインド亜大陸から大量の移民として押し寄せてきた人々に対して、文化的に多様であったにもかかわらず、彼らに自分自身を政治的に黒人としてのアイデンティティを抱かせたのであ

た⁵⁷⁾。つまり、実際の肌の黒色の濃淡が多様であったにもかかわらず、彼らを分断する以上に結合させたのである。ホールはこの点について敵がエスニシティーであり、また敵が「多文化主義 (multi-culturalism)」であったことを指摘する。なぜなら、多文化主義はまさに「エキゾチックなもの (the exotic)」を意味しており、「国際の夕べ (International Evenings)」に見られるような陳腐な国際交流の場において、民族音楽の演奏や民族料理の皿をならべて、彼ら自身がこれまで身に着けたことのないような民族衣装とともに、彼らを無理強いして多文化主義のスペクタクルのなかに放り込むからである⁵⁸⁾。

それでは、このような闘争は既に終焉したのだろうか。ホールは、社会の中心に人種主義的な側面が残存する限り、闘争は継続されるが、政治的なアイデンティティとしての黒人は常に複雑かつ歴史的に構成されており、同じ場所には絶対にはありえず、常に状況によって位置づけられる点を指摘する。ホールはこれを「差異を通じて生きるアイデンティティの政治 (the politics of living identity through difference)」として提示する。それは「状況の政治」において我々が単一ではなく、多面的な社会的アイデンティティによって構成されていることを認識するものである⁵⁹⁾。近年では、移民第三世代の若い黒人男女は自分たちがカリブ出身者であり、黒人であり、英国人であることを意識しており、三つのすべてのアイデンティティから多面的に語ることを望んでいる。それらは他のどれか一つを屈伏させるものではない。それでは、多面的なアイデンティティには「人間性 (humanity)」のような普遍的なものも含まれるのだろうか？ホールは単に人間性という共通項を通じて人々が行動するとは考えられないことから、グローバルなものを我々全員が人間であることで有するある種の最大公約数的な利害関係と同一視することを戒めている。むしろ、「普遍的なもの (the universal)」が単にそれが普遍的であろうとする願望やプロジェクトを意味するものに過ぎず、またグローバルなものを「支配的な個別的なもの (the dominant particular)」による自己表現として捉えたうえで、グローバルなものが多様なアイデンティティを副次的な位置へと組み込んでいく点にこそ注意を喚起するのである⁶⁰⁾。

それでは、強力に展開されるグローバリゼーションのプロセスに対抗可能なローカルのカウンター・ポリティクスは存在するのだろうか？ホールはその存在を認め

ながらも、それらが複数形の小さなポリティクスでしかなく、A・グラムシ (Antonio Gramsci) の「陣地戦 (the war of position)」のような闘争にならざるを得ず、またそれについて考えることが困難である点を指摘する。なぜなら、アイデンティティには外部からの政治・経済的な力が作用して変化とシフトがもたらされるために、アイデンティティに対する政治的な保証など存在しないからである。グローバリゼーションのプロセスに対抗して、世界の各地域のあらゆるローカルなものが同時に立ち上がる可能性はほとんどあり得ない。というのも、グローバルな政治とローカルな政治は常に相互に浸透しているわけではないからである。このようにホールはグローバルなものについてのオルターナティブ・ポリティクスを構築しようとする試みには否定的な見解を示すのである⁶¹⁾。

このようにホールの見解においてはグローバルなものと同ローカルなものの変貌が多様な主観的な立場をもたらし、またそれらを変容させる点について言及している点に興味深い。さらに、黒人のアイデンティティをめぐる記述は多くの点で示唆に富むものであろう。というのも、一般に人種や民族といった問題はこれまで曖昧なままで議論されがちであったし、また両方とも固定的な古いアイデンティティの形態に結びつけて考えられてきた傾向を否定できないからである。また、ロバートソンとは異なり、ホールのグローバリゼーションをめぐる議論には明確に資本のグローバリゼーションの問題が示されており、それが西欧中心的で不均等なプロセスであることが強調されているが、この点は周縁部が強力な空間となりつつあるという見解と併せて考えるべきであろう。

VI 結びにかえて——暫定的結論——

グローバリゼーションがもたらす影響が地球上に同質化をもたらすわけではないことは明らかである。たとえインターネットが点と線を結ぶ情報網を地球上に張り巡らせても、そこにアクセスして情報を入手できる特権者の数は圧倒的に各国の首都にみられる巨大都市 (mega-city) に偏在するであろうし、この傾向はいわゆる第三世界において顕著なものとなろう。例えば、A・キング (Anthony E. King) は現代の世界都市の特徴である「グローバル・アーバニティー (global urbanity)」

という概念を提示しているが、それはホールの言葉を借りればグローバルな大衆文化である⁶²⁾。だが、文化をグローバルな文脈で議論するうえで、J・ウォルフ (Janet Wolff) が指摘するように、ここに取り上げた議論のなかでもその定義にいくぶん隔たりがあることは否定できない。文化という言葉には複雑な歴史があり、またあまりにも多様な方法で用いられてきたので定義しないことこそが問題の解決である、というロバートソンの見解の妥当性はともかくとしても⁶³⁾、「文化」という言葉は、生活様式 (ハンネルズ)、芸術とメディア (ハンネルズとホール)、政治文化またおそらく宗教文化 (ウォーラーズテインとホール)、グローバリゼーションへの態度 (ロバートソン) などの多様な意味で用いられている⁶⁴⁾。

さらに、ウォーラーズテイン、ロバートソン、そしてハンネルズの議論に共通して指摘できることであるが、文化越境／変容に関して経済的な側面と社会的な側面についての区分が必ずしも明確ではない。つまり、グローバリゼーションと文化越境／変容については検討されているが、アイデンティティ (と周縁部の吸収／対抗への動き) に及ぼす影響について説得力に欠けていると指摘できる⁶⁵⁾。おそらく、この点については新聞やラジオ、そしてテレビといった国民文化産業 (national cultural industry)、またディズニーやCNNに代表されるグローバルな文化産業 (global cultural industry) の形成とそれらが受容者にもたらす影響について考える必要性が指摘できよう⁶⁶⁾。

人々が多数の文化に接するようになり、またアイデンティティが特定の状況において流動的に多面的に形成されるようになっていくことをグローバルなレベルの変動に結びつける視座は、大きなイデオロギーの枠組みが消失した冷戦後の世界の文化政治を考えるうえでますます重要なものとなろう。ホールが厳しく批判する1980年代における英国のサッチャリズムは文化的な愛国主義や排外主義とともに⁶⁷⁾、マルピナス戦争 (フォークランド紛争) にみられる軍事的な強硬姿勢と軍拡路線、そして経済的な新自由主義を推進した。このような傾向は一般的に80年代の先進国を指導した長期政権の多くに該当するものであるが、それらは規制緩和や民営化を通じて「小さな政府」の実現を目指すと同時に、文化やアイデンティティに関しては国民に共通の価値観を無理強いする強力な国家を指向するものであった。つまり、国家の権力の縮小化と世界的な資本の流動化による国内の社会的、文化的な混

乱を回避するために、国家の権威を強大化する必要に迫られたのである。それは結果的には国家による死刑などの刑罰の強化や妊娠中絶の抑制、また伝統的な家父長制的な家族関係の維持や生命倫理といった個人の内面的な価値の問題に立ち入るのみならず、これ以上の価値観の多様化を阻害し、旧来の伝統的・民族的な文化の高揚といった排外主義的な傾向を促進したのであった。この意味では、手段としての自由主義と価値としての保守主義が、同じく国家の肥大化に対抗して70年代に現れた新しい社会運動に見られる「新しい政治」と真っ向から対立する形で、80年代の先進国における一連のポスト福祉国家へのドラスティックな変化を推進したのである。これら新右派（への批判も画一的であるが）による対抗革命は、経済的な効率性と引き換えに、結果的に（一時的に？）社会的な歪みをさらに悪化させるものとなった。

だが、発展途上世界においてはむしろ90年代に入ってからIMFなどの勧告に基づいて資金導入のために、公共料金や食料品などの高騰や大量の失業を伴う数々のショック療法的な経済政策が採用されており、その影響が貧困層を直撃している。また豊かな世界を目指す国際的な労働力移動も急増している。今日ではポスト冷戦という極めて消極的な言葉以外に明確に時代を規定する言葉はなく、左派の側にも現存「した」社会主義に代わる魅力的なオルターナティブも見当たらず、政治的な対立軸も不明瞭となっている。このような状況の下で文化政治あるいはアイデンティティ政治は、発展途上世界や先進国の巨大都市の周縁部に暮らす公式の政治へのチャンネルから切り離された人々にとって、つまり政治的なインフォーマル・セクターにおいて、さらに重要なものとなろう。この点は先進国や発展途上国に共通するものだが、後者においては多くの場合には武装蜂起やテロなどの暴力を伴う傾向は否定できないであろう。それらの行為（の正当性はともかくとしても）は少なからず、グローバリゼーションの強大なプロセスにライフ（life：生活・人生・生命）を翻弄される弱者の立場にある人々による最周縁部からの異議申し立てに、世界の多くの聴衆を引きつけようとする目的を伴うものでもある⁶⁸。そこではグローバル・メディアでさえをも逆手に取って、自らの主張を世界に向けて発信する手段として用いている。このように、グローバリゼーションは非政府組織などの市民活動のみならず、反政府組織等の集団にとっても新たな政治的な同盟の可能性をもたら

すなど、これまでには考えられもしなかったほどに政治的な地平を拡張しているのである⁶⁹⁾。しかしながら、いみじくもホールが指摘したように、変革の実現について楽観的に考えることはできない。アイデンティティ政治や文化政治は言わば「微分化された政治」であり、その多様な対立軸は微細で流動的で常に形成途上であり、かつての社会主義が描き示したような大規模な綱領化されたユートピアを提示するものではない（からこそ多様な形態で存続し得るのかもしれない）。

さらに、グローバリゼーションによってグローバルな大衆文化を享受することのできる（特に先進国の）人々の政治的想像力がますます貧困なものとなる傾向も指摘できる。新世界無秩序のディスコースを安易に受け入れるならば、短絡的に南の世界が殺戮と犯罪と貧困のみに彩られた地域として映るであろうし、異質な他者に対して過剰防衛とも言える反応をもたらして、「想像の戦争 (Imaginary War)」が東西冷戦に代わって南北間で繰り広げられ⁷⁰⁾、北の世界においてのみ生命の安全と物質的な豊かさが保証される先進工業国家群の「要塞化」の傾向を促す可能性もある。もちろん、これらはおおよそ想像の域を出るものではない。しかしながら、安直な歴史の幕引きを主張するような他者に同質化を迫るシナリオも、文明という客観的に敵を決めつける条件を持ち出して他者を排除するシナリオも、それぞれの議論においては基本的に自己の立場が普遍的でかつ不変であることが暗黙の前提とされており、あまりにも安易な想像に依拠したものである。グローバリゼーションの影響と帰結を考えるうえで、文化とアイデンティティの問題を検討することは不可欠な作業であり、その作業無しには非歴史的な視点しかもたらされない。アイデンティティの世界政治学について新たに構想する時代が既に訪れているのである。

註

- 1) この点を考えるうえで、佐藤幸男『開発の構造——第三世界の開発／発展の政治社会学——』同文館、1989年、199-206頁；同「グローバル化のなかのメディア文化」アジア経済研究所編『第三世界のマスメディア』明石書店、1995年、7-19頁、が示唆に富む。
- 2) ポスト冷戦時代の地域紛争については、澤田真治「地域紛争の世界政治学——冷戦から内戦への構図——」『軍縮問題資料』、第194号（1997年1月）、20-5頁、また、同「地域紛争にみる冷戦後の世界——21世紀の地球的問題を考える——」『現代用語の基礎知識1998』自由国民社、

- 141-8頁, を参照されたい。
- 3) 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ——近代文化批判——』岩波書店, 1996年, 156-64頁, においてハンティントンの議論に対して世界システムの変容という視点から批判が加えられている。
- 4) Arjun Appadurai, “Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy,” in Mike Featherstone, ed., *Global Culture : Nationalism, Globalization and Modernity*, London ; Sage in association with *Theory, Culture and Society*, 1990, pp.295-6 ; Ulf Hannerz, “Scenarios for Peripheral Cultures,” in Anthony D. King, ed., *Culture, Globalization and World-System : Contemporary Conditions for the Representation of Identity*, London ; MacMillan in association with Department of Art and Art History, State University of New York(SUNY), at Binghampton, 1991, pp.107-8. 邦文では, 日本記号学会編『多文化主義の記号論』(記号学研究16) 東海大学出版会, 1996年, に興味深い論考が収められている。
- 5) 冷戦後の国際社会における「南」の脅威のディスコースを鋭く読み解いた著作として, 高柳先男「冷戦後国際社会の差別の構造——『新世界〈無〉秩序』の言説における排除の論理——」栗原彬編『現代世界の差別構造』(講座・差別の社会学第3巻) 弘文堂, 1997年, 241-53頁, が世界秩序の変容と国際政治の「知と権力」の問題について貴重な示唆に富んでいる。
- 6) 戦争について人類学的な視点からの考察として, 栗本英世「未開の戦争, 現代の戦争」『紛争と運動』(岩波講座文化人類学第6巻) 岩波書店, 1997年, 23-61頁, が新しい試みとして興味深い。
- 7) 文化の越境や変容の問題について現代の文脈で考える場合には, 「文化帝国主義」の「帝国」という言葉に表現されるように, 特定の大国や政治権力の問題として一元的に把握するのではなく, 市場などの他の要因を考慮に含める必要性は明らかであり, また少なくとも「帝国主義」という用語はいくぶん時代錯誤的ですからある。だからと云って, 帝国の時代の他者や異文化に対する自己の「まなざし」への無意識が現代においても重大な問題であることに変わりはない。「かつて……アジアの民衆の呼び声に応じて手を差し伸べる, という自己の……あからさまな使命感や倫理主義にかわって, (今日では) 異文化への理解が語られ, 差異性への尊重が説かれる。異質な文化や民衆を商品として前提にすることによって理解や交流を実現しようとする」のである。池田浩士「植民と観光のあいだ——〈五族協和〉はどう実現されたか——」池田浩士・天野恵一共編『国際化という〈ファシズム〉』(検証—昭和の思想 I—) 社会評論社, 1988年, 57-96頁(引用は91頁), は植民地と観光地へのまなざしの連続性を指摘していて興味深い。
- 8) 文化帝国主義についての代表的な著作としては, アリエル・ドルフマン, アルマン・マトゥラーレ『ドナルド・ダックを読む』(山崎カヲル訳) 晶文社, 1984年, があげられる。なお, 文化帝国主義の問題点を摘出した著作としては, John Tomlinson, *Cultural Imperialism : A Critical Introduction*, Baltimore ; Johns Hopkins University Press, 1991 (『文化帝国主義』片岡信訳, 青土社, 1993年), があるが, トムリンソンのいくぶん楽観的な結論に対する厳しい批判については, 姜尚中, 前掲書, 200-8頁, を参照されたい。
- 9) 例えば, 馬場伸也『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会, 1980年, また, 同『地球文化のゆくえ』東京大学出版会, 1983年, がある。故馬場氏のこれらの著作が新冷戦と

- 呼ばれた東西対立が再燃した1980年代初頭に刊行されたことの意義は無視できない。というのも、それに先立つデタント期の1970年代においては国際政治の現実にも理論の世界にも明らかに多元化の傾向を指摘できたが、80年代には旧来の国家間関係と権力政治が中心の世界観を中心に据える動きが顕著であったからである。その意味ではこれらの著作は時代を先取りした、ある種の知的な運動でもあったが、冷戦後の今日には新たな視点から(批判的にも)再読される必要がある。また、日本においてグローバルな社会学を構想した先駆的な試みとして、栗原彬・今防人・杉山光信・山本哲士共編『世界社会学をめざして』(叢書社会と社会学 1) 新評論, 1983年, があるが、その発刊趣旨は現在も示唆に富む。
- 10) Arjun Appadurai, pp.296 ff. 邦文では、山下晋司「南へノ南へノ —— 移動の民族誌 ——」『移動の民族誌』(岩波講座文化人類学第7巻) 岩波書店, 1996年, 1-28頁, がアバドゥライの枠組みに依拠して議論を展開している。
 - 11) Immanuel Wallerstein, *The Capitalist World-Economy*, Cambridge ; Cambridge University Press, 1979, p.5 (『資本主義世界経済 I —— 中核と周辺の不平等 ——』藤瀬浩司, 麻沼賢彦, 金井雄一訳, 名古屋大学出版会, 1987年, 6-7頁)。
 - 12) Immanuel Wallerstein, "The National and the Universal : Can There Be Such a Thing as World Culture," in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp.92-3 ; ditto, *Geopolitics and geoculture : Essays on the changing world-system*, Cambridge : Cambridge University Press, 1991, pp. 185-6 (『ポスト・アメリカ —— 世界システムにおける地政学と地政文化 ——』丸山勝訳, 藤原書店, 1991年, 294-6頁)。
 - 13) *Ibid.*, pp.160-2, 184-5 and 7 ; ditto, "Culture as the Ideological Battleground of the Modern World-System," in Mike Featherstone, ed., *op. cit.*, pp.33-5 (同訳書, 255-9頁) ; ditto, "The National and the Universal," pp.91-2 and 94 (同訳書, 293-4並びに298-9頁)。
 - 14) *Ibid.*, pp.95-6 ; ditto, *Geopolitics and geoculture*, p.189 (同訳書, 300-1頁)。
 - 15) Immanuel Wallerstein, *The Politics of the World Economy : The State, the Movements and the Civilizations*, Cambridge ; Cambridge University Press, 1984, pp.170-1 (『世界経済の政治学 —— 国家・運動・文明 ——』田中治男, 伊豫谷登士翁, 内藤俊雄訳, 同文館, 1991年, 275-6頁)。
 - 16) Immanuel Wallerstein, "The National and the Universal," pp.98-9 ; ditto, *Geopolitics and geoculture*, pp.192-3 (前掲訳書, 304-5頁)。
 - 17) Immanuel Wallerstein, *The Politics of the World Economy*, pp.166-7 (前掲訳書, 267頁)。
 - 18) Immanuel Wallerstein, "The National and the Universal," p.99 ; ditto, *Geopolitics and geoculture*, pp.192-3 (前掲訳書, 305-6頁)。
 - 19) Immanuel Wallerstein, *The Politics of the World Economy*, p.184 (前掲訳書, 297頁)。
 - 20) Immanuel Wallerstein, "Culture as the Ideological Battleground of the Modern World-System," pp.48-53 ; ditto, *Geopolitics and geoculture*, pp.177-82 (前掲訳書, 281-9頁)。
 - 21) Immanuel Wallerstein, "The National and the Universal," pp.99-102 ; ditto, *Geopolitics and geoculture*, pp.193-6 (同訳書, 306-12頁)。
 - 22) Roy Boyne, "Culture and the World-System," in Mike Featherstone, ed., *op. cit.*, pp.57-62。

- なお、ポインの批判に対する反論として、Immanuel Wallerstein, “Culture is the World-System : A Reply to Boyne,” in *ibid*, pp.63-5.
- 23) Janet Wolff, “The Global and the Specific : Reconciling Conflicting Theories of Culture,” in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, p.168.
- 24) Jan Nederveen Pieterse, “A Critique of World System Theory,” *International Sociology*, Vol.3, No.3 (Sep. 1988), pp.251-66.
- 25) イマニュエル・ウォーラーステイン「ポスト・アメリカとレーニン主義の崩壊」(前掲訳書『世界経済の政治学』に補論として所収), 316-7頁。
- 26) Giovanni Arrighi, Terence K. Hopkins and Immanuel Wallerstein, *Antisystemic Movement*, London ; Verso, 1989, chap.5 (『反システム運動』太田仁樹訳, 大村書店, 1992年, 第5章)。この点についての優れた批判として, 崎山政毅「『世界システム論』からあらたな抵抗の可能性へ」『月刊フォーラム』, 1996年11月号, 16-28頁, がある。
- 27) Roland Robertson, “Social Theory, Cultural Relativity and the Problem of Globality,” in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp.72-73 ; ditto, *Globalization : Social Theory and Global Culture*, London : Sage in association with *Theory, Culture and Society*, 1992, pp.99-100 (『グローバリゼーション——地球文化の社会理論——』(抄訳) 阿部美哉訳, 東京大学出版会, 1997年, 130-1頁)。
- 28) Roland Robertson and Frank Lechner, “Modernization, Globalization and the Problem of Culture in World-Systems Theory,” *Theory, Culture and Society : Explorations in Critical Social Science*, Vol.2, No.3 (Special Issue on the Fate of Modernity), 1985, pp.103 and 107-9 ; Roland Robertson, *Globalization*, pp.61 and 65-8.
- 29) Roland Robertson, “Social Theory, Cultural Relativity and the Problem of Globality,” pp. 73-4 ; ditto, *Globalization*, pp.100 (前掲訳書, 131-2頁) and 130 ; ditto, “Globalization Theory and Civilization Analysis,” *Comparative Civilizations Review*, No.17 (Fall, 1987), p. 21. 他に, ローランド・ロバートソン「『グローバル・トライアド』——普遍と個別の綱引きをめぐって——」(梶尾直樹訳) 国学院大学日本文化研究所編『グローバル化と民族文化』新書館, 1997年, 305-16頁, においてもこの点について言及されている。
- 30) Roland Robertson, “Social Theory, Cultural Relativity and the Problem of Globality,” pp. 74-7 ; ditto, *Globalization*, pp.100-3 (前掲訳書, 132-7頁), 173 and 177-81.
- 31) Roland Robertson, “Social Theory, Cultural Relativity and the Problem of Globality,” pp. 79-81 ; ditto, *Globalization*, pp.25-8 and 104-5 (前掲訳書, 52-58, 並びに139-41頁)。
- 32) Roland Robertson and Frank Lechner, “Modernization, Globalization and the Problem of Culture in World-Systems Theory,” pp.104-7 ; Roland Robertson, “Social Theory, Cultural Relativity and the Problem of Globality,” pp.82-7 ; ditto, *Globalization*, pp.8-25 and 108-12 (前掲訳書, 19-52, 並びに149-57頁)。
- 33) Roland Robertson, “Glocalization : Time-Space and Homogeneity-Heterogeneity,” in Mike Featherstone, Scott Lash and Roland Robertson, eds., *Global Modernities*, London : Sage in association with *Theory, Culture and Society*, 1995, pp.25-44.

- 34) Albert Paolini, "Globalization," in Phillip Darby, ed., *At the Edge of International Relations : Postcolonialism, Gender, Dependency*, London and New York : Pinter, 1997, pp. 44-6.
- 35) Ulf Hannerz, "Culture Between Center and Periphery : Toward a Macroanthropology," *Ethnos*, Vol.54, No.3-4 (1989) pp.200-16.
- 36) Ulf Hannerz, "The World in Creolisation," *Africa*, Vol.57, No.4 (1987), pp.546-59.
- 37) Ulf Hannerz, "Scenarios for Peripheral Cultures," pp.109-10.
- 38) Ulf Hannerz, "Cosmopolitans and Locals in World Culture," in Mike Featherstone, ed., *op. cit.*, p.237.
- 39) Ulf Hannerz, *Cultural Complexity : Studies in the Social Organization of Meaning*, New York: Columbia University Press, 1992, pp.46-52 ; ditto, "Scenarios for Peripheral Cultures," pp.111-16. なお、ハンネルズによる文化の流れの四つの枠組みについては、註10) に示したアパドゥライが指摘した五つの次元との連関を考えてみる必要がある。
- 40) *Ibid.*, pp.121-5.
- 41) Ulf Hannerz, "Cosmopolitans and Locals in World Culture," pp.249-50.
- 42) Ulf Hannerz, "Scenarios for Peripheral Cultures," pp.125-8 ; ditto, "The World in Creolisation," pp.556-7.
- 43) Jan Nederveen Pieterse, "Globalization as Hybridization," in Mike Featherstone, Scott Lash and Roland Robertson, eds., *op. cit.*, p.62.
- 44) Janet Abu-Lughod, "Going Beyond Global Babble," in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp. 131-7.
- 45) Barbara Abou-El-Haj, "Languages and Models for Cultural Exchanges," in Anthony D. King, ed. *op. cit.*, pp.139-44.
- 46) カルチュラル・スタディーズ (文化研究) については、1996年3月15日に東京大学社会情報研究所とブリティッシュ・カウンシル共催による公開講演会「カルチュラル・スタディーズとの対話」において、S・ホールによって「カルチュラル・スタディーズの翼に乗って、旅立とう——カルチュラル・スタディーズのトランスナショナルイゼーション——」のテーマで極めて興味深い講演が行われた。なお、当日のホールの議論やカルチュラル・スタディーズの展望などについては司会者を務められた吉見俊哉氏によって以下に記されている。吉見俊哉「カルチュラル・スタディーズとの対話をめぐって」『大航海』(特集：ポストモダン再考)第10号(1996年6月), 120-31頁。
- 47) Stuart Hall, "The Question of Cultural Identity," in Stuart Hall, David Held and Tony McGrew, eds., *Modernity and Its Futures : Understanding Modern Societies*, London : Polity Press in association with the Open University Press, 1992, pp.296-99 ; ditto, "The Local and the Global : Globalization and Ethnicity," in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp.20-2.
- 48) *Ibid.*, p.25.
- 49) *Ibid.*, pp.27-8.
- 50) *Ibid.*, pp.28-30.

- 51) Stuart Hall, "The Question of Cultural Identity," pp.302-5 ; ditto, "The Local and the Global : Globalization and Ethnicity," p.33.
- 52) *Ibid.*, pp.33-5.
- 53) Stuart Hall, "Old and New Identities, Old and New Ethnicities," in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp.44-6.
- 54) Stuart Hall, "The Question of Cultural Identity," pp.276-7 ; ditto, "Old and New Identities, Old and New Ethnicities," pp.47-9.
- 55) Stuart Hall, "Negotiating Caribbean Identities," *New Left Review*, No.209 (Jan./Feb. 1995), pp.3-14 ; ditto, "Old and New Identities, Old and New Ethnicities," pp.52-3.
- 56) *Ibid.*, pp.53-4. ホール自身の個人史におけるアイデンティティ政治の問題については以下のインタビューが極めて興味深い。"The formation of a diasporic intellectual : an interview with Stuart Hall by Kuan-Husing Chen," in David Morley and Kuan-Husing Chen, eds., *Stuart Hall : Critical Dialogue in Cultural Studies*, London : Routledge, 1996, pp.484-53 (「あるディアスポラの知識人の形成」(小笠原博毅訳)『思想』(特集:カルチュラル・スタディーズ — 新しい文化批判のために —), 第859号 (1996年1月), 6-30頁。)
- 57) Stuart Hall, "The Question of Cultural Identity," pp.307-9.
- 58) Stuart Hall, "Old and New Identities, Old and New Ethnicities," pp.55-6.
- 59) *Ibid.*, pp.57-9.この点は少数者による運動や芸術におけるアイデンティティの表出を考える場合に重要であり, 以下のインタビューが示唆に富む。スチュアート・ホール, ポール・ギルロイ他「人種と映画」(水島一憲訳)『現代思想』(特集:カルチュラル・スタディーズ), 第24巻3号 (1996年3月), 150-66頁。
- 60) Stuart Hall, "Old and New Identities, Old and New Ethnicities," pp.67-8.
- 61) *Ibid.*, pp.57-8 and pp.61-3.
- 62) Anthony King, "The Global, the Urban, and the World," in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp.149-54.
- 63) Roland Robertson, "The Sociological Significance of Culture : Some General Considerations," *Theory, Culture and Society : Explorations in Critical Social Science*, Vol.5, No.1 (1988), p.4 ; ditto, *Globalization*, p.33 (前掲訳書, 69-70頁)。
- 64) Janet Wolff, "The Global and the Specific : Reconciling Conflicting Theories of Culture," pp.167-8.
- 65) Maureen Turim, "Specificity and Culture," and John Tagg, "Globalization, Totalization and Discursive Field," in Anthony D. King, ed., *op. cit.*, pp.145-8, and 155-60.
- 66) この点については, William Rowe and Vivian Schelling, *Meomory and Modernity : Popular Culture in Latin America*, London : Verso, 1991 (「記憶と近代 — ラテンアメリカの民衆文化 —」(インディアス群書第20巻) 澤田眞治・向山恭一訳, 現代企画室, 近刊), が示唆に富む。
- 67) サッチャーリズム (Thatcherism) に関するホールの著作として, Stuart Hall and Martin Jaques, eds., *The Politics of Thatcherism*, London : Lawrence and Wishart in association

with *Marxism Today*, 1983 ; Stuart Hall, *The Hard Road to Renewal : Thatcherism and the Crisis of the Left*, London : Verso, 1988,がある。

- 68) この点については、向山恭一「無意識のナショナリズムを撃つ」『私学公論』（特集：国民国家の現在）第30巻2号（1997年4月），12-7頁，が辺境の世界性的の問題について論じている。
- 69) この点について筆者は部分的に既に論じたことがある。澤田眞治「グローバリゼーションと『第三世界』の現在——ポスト・コロニアルの政治学に向けて——」『私学公論』（特集：ポスト・コロニアルの知）第30巻3号（1997年10月），13-8頁。
- 70) Mary Kaldor, *The Imaginary War : Understanding the East-West Conflict*, London : Basil Blackwell, 1990, chap.13. なお「想像の戦争」について邦文では、澤田眞治（書評）「世界政治へのオルターナティブのパースペクティヴを求めて：マリー・カルドー著『想像の戦争——東西対立の理解のために——』」『広島平和科学』第18号，1995年，229-43頁。